



## 雑 報

### ● 眼の瞳孔の大きさ

夜の星を見る時の瞳孔の直径については普通の天文書には多く「五分の一時」を書いているが、此の數値は誰が算出したものか明らかでない。ところが、キリアム・ハーシエルが1817年のPhilosophical Transaction 誌第302頁に書いた記事によると、彼れば片眼で、いろいろ大きさの異なる穴を通してゴカ星を覗いて見たとき、丁度一時の五分の一を直径とする穴よりも少しでも小さい穴から覗けば星の光りが小さく見えるさういふ、結果を得たさういふ。しかし、ステヴンソン氏(W. H. Stevenson)は、近頃21歳から25歳までの五人の人の瞳孔を寫眞に撮つて、瞳孔の直径の平均は一時の三分の一であるさういふ結果を得た。前記のハーシエルの實驗は1801年十二月に行つたものであるが、當時ハーシエルは63歳であつたから、實驗の結果の差異は此の年齢の差に因るものだらうと思はれる。

### ● 金星の背面光輝

月が、三日月の頃、直接太陽に照されてゐない部分(即ち、當然、暗黒であるべき部分)が、弱い光りでボンヤリと輝やいてゐる現象は、肉眼でも、望遠鏡でも、吾人が平常觀察することであるが金星も亦た太陽に背いてゐる半面が淡く光りを放つてゐることが可なり昔からの望遠鏡觀察者に知られてゐる。歴史に據ると、金星の此の背面光輝を最初に見たのは1643年のリチオリ(Riccioli)ださういふことであるが、其の後、1715年にはテラム(Derham)1721年にはキルヒ(Kirch)1806年にはハルデンク(Harding)が見た

記録を遺してゐる、

そこで、之れが何故であるかさういふ理由については、下の如き諸説がある——

1. 地球光に據るとの説——之れは1883年1月8日ゼンガー(Zenger)が此の現象を非常に明瞭に觀察し、従つて、月の場合と同様に之れを地球からの光りに照らされてゐる結果であるを考へた。
2. 金星表面の燐光ださういふ説——之れはサフリク(Safarik)が唱へたもの。
3. 一種の薄明現象とする説——之れはドイツ國ポルトカンブでフォゲル(Vogel)とローセ(Lohse)とが1871年11月上旬に觀察した經驗から言ひ出した説である。
4. オーローラ説——ランプ(J. Lamp)が1887年10月26日及び26日に觀察した經驗から唱へた説。
5. 金星固有の光とする説
6. 偶然的燃焼現象
7. 背景との對照による感覺——太陽のコロナ光を背景としてゐるため。

此等の説の何れが眞であるかは、むしろ未解決であるが、とにかく、實際此の現象を觀察することが最も必要である。本誌第71號に載せた如く、今年は金星が好都合に觀られる時機であるから、我國のアマチュア達も此の種の觀察を進んで試みられんことを望む。

### ● ハーグード變光星第4000番

米國ハーグード學院天文臺で毎年發見される新しい變光星が遂に4000個に達した。近着の同天文臺ブレテン第844號(本年3月1日發行)に此の第4000番變光星が載せられてゐる。發見者はW. J. Luyten

(ライテン)氏で、星の位置は  
赤經 18h 56m22s 赤緯—37°21'2(1900  
分點)

即ち、星座はいて座の南の**みなみうき座**で其のε星に極めて近い、此の變光星は最大光度が13.0、最小は恐らく18.0に達するらしく、週期は多分500日ぐらゐである。此の星のあたりが有名な暗黒星雲のあるあたりなので、此の星と此の暗雲との間の關係は興味ある問題であるが、ライテン氏は**みなみうき**TY座星といふ蝕變星の考察によつて、暗雲が少なくとも500パーセク(1500光年)の距離にあるものと考へ、従つて此の新變光星はTY星よりも「4光級」だけ暗雲の奥にあるだらうと推論してゐる。

### ●国際天文同盟總會

さきに、1922年の第一回總會は伊國ローマ市で開かれ(日本からは平山信、木村榮兩氏出席)、1925の第二回總會は英國ケンブリヂ大學で開かれ(日本からは長岡半太郎、平山清次兩氏出席)たが、次ぎの第三回總會は來1928年7月5日よりオランダ國ライデン大學に於いて開かれる

ことに決定した由、

### ●パリ天文臺長交迭

フランス國立パリ天文臺長バヨール(Baillaud)氏は今1927年1月1日に退職し南佛トゥルヴズ(Toulouse)に餘生を送るこゝまなつた。バヨール氏に代つて、新たにムドン天文臺長たるテラランドル(Derlandres)氏がパリ天文臺長を兼ねるこゝまなつた。

### ●京都での天文展覽會

去る四月二十三日から同二十九日まで京都の高島屋呉服店樓上で「天體に關する展覽會」が催され、大阪毎日新聞社が後援し本會の山本氏が始めから顧問として之れを援助した。大天球や太陽系の模型、星座や日月の美しい畫、銀河や星雲星團等の大きな寫眞、諸所の天文臺や大望遠鏡の寫眞や模型、古今の有名な天文學者たちの肖像など、珍らしいものが列べられ、一般の人々ばかりでなく、かなりの専門家も、教科書以外の生きた智識を得た。

